
最硬の肉体を持つ一般人

放浪の焼きそば売り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最硬の肉体を持つ一般人

【Nコード】

N6125Z

【作者名】

放浪の焼きそば売り

【あらすじ】

耐久対魔対呪硬化EXの転生者がいたらどうなるか、という私の興味で書く二次創作です

主人公設定（前書き）

主人公の設定です。

食人鬼書かなきや……………

主人公設定

主人公名…玄武甲羅^{げんぶこうら}

性格…基本的にのんびりとしており、温和で争い事は好まない
でもぷっちょんするとどっかから鎖で亀甲縛りした直径約1mで約7
kgの甲羅で攻撃してくる。

原作知識はうろおぼえ

魔術回路もない。だが使っている甲羅が神の加護を受けている為、
甲羅を使つての攻撃は当たる。

ステータス

筋力…E

耐久…EX

俊敏…E

幸運…C

宝具…？

保持スキル

硬化…EX

感想で指摘があつたので急遽つけたスキル。攻撃を認識しなくても
硬化して自身の身を守る。怪我もしないというお得

指摘してくれたお方に感謝

衝撃吸収…A

投げられた卵も衝撃では割れない。

硬いからどっちみち割れる。

対魔力…EX

魔術？なにそれ美味しいの？状態。

魔術師涙目

対呪…EX

呪いなんてなかった。と言わんばかりのスキル。

アンリマユエ……………

回復…C

常人離れした再生力。でも硬化EXだからエヌマエリシュやられなきゃこのスキルは出番がない

えいえんのにばんて…EX

温和な性格故相手から攻撃を受けたりぶちぎれたりしないかぎり攻撃しない。

緑色の配管工と友達になれそうなスキル

主人公設定（後書き）

うひー今からプロログ書かなきゃ

誤字あったら指摘してつかあさい

戦闘員一号様、耐久の指摘有難う御座います

プロローグですねえ

—主人公—

「おやあ、ここはどこでしょうか？」

見渡す限り真っ白ですねえ。ここが死後の世界でしょうか。見たところ私一人なのでここで孤独に生きるのでしょうか。あ、もう死んでいましたね。

「あ、あの……」

「おやあ？先程まで私以外いなかった空間に人が……」

「あなたも死んでしまったのですかあ？ どうやら今は二人だけのよ
うなので私はここについての推測は終わったのでお話でもしますか
？」

「あ、ああそのえーと……言いにくいのですが……」

「どうかしましたか？」

「すいませでしたあああああ……！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「おやあ、凄いですねえ。ジャンプした後その途中で土下座。見事なものです。」

あれ………？ 私この女性になにかされましたっけ？ うーむ、思い出せません。

「この度は本当に申し訳ございませんでした!!」

「んゝ身に覚えがないですねえ」

「なん……だと……!？」

某死神漫画の主人公の顔みたいになりましたねえ……面白い人です。

「あ、あの！本当に覚えていないんですか！？」

「んゝ死んだと思われる数時間前の記憶はあるんですけどねえ。」

「え、ええと。その記憶がない時にあなたは殺されてしまったのです。」

「死因はなんですか？」

「え！？えーと死因は……自然死です。」

「なんででしょうかねえ……」

「もういいです。それでチートですが」

「あらゆる攻撃とかをくらってしまっても大丈夫な肉体が欲しいですねえ。滝太郎と遊んでいる時に怪我をしてしまいましたし。」

「わかりました（多分EX級でやっと切り傷やしもやけ、やけどになつて魔力とかを無効化、衝撃を吸収する肉体が欲しいんですね……）」

「？」

なにかとんでもないことになりそうですが……まあいいです。

「おまけに武器でもあげます。暴走した動物を鎮静できるように」

「ん〜でしたら鎖がいいですねえ。前に滝太郎が暴れた時に縄では抑えることができませんでしたから。」

「はい、わかりました。それではよい世界を」

「第二の人生ですか。楽しみです。」

「あ、テンプレで穴が開きます。」

え？

パカッ

「なんということでしょうおおおおおお………」

…

「匠の技で見事に落ちていきました……って何を言ってるんですか
私は」

プロローグですねえ（後書き）

劇○ビフ○ーアフターが作者は好きです

そういえばアフターのときに流れるピアノの曲の名前はなんでしょうかね？私は知らないのです。

修正しました。えぞくろてん様、ご指摘ありがとうございます。

つきましたねえ（前書き）

通知表……3が4つしかありませんでした。
あと全部2つて……高校、大丈夫かな

つきましたねえ

「……………おおおおおおおおおおおお！！
いたっ！

な、なんで穴なんでしょうか……それに何故私は怪我を……ああ、
そういえばがんじょうな肉体^{からだ}をもらったんだした。この年で物忘れ
は勘弁してほしいですねえ。」

ころころと笑い自分が今どこにいるのか玄武は推測する

（ここは……見たところ森でしょうね……。ですが動物の気配が
ありませんね）

森で動物の気配がない。というのはおかしかった。たとえ冬で冬眠
していても微かな気でわかる。

（ああ、雪ですねえ。私のところでは雪が多く積もって大変でした。
）

しかしそこで違和感

（はて、何故寒くないのでしょうか。）

そう、寒くないのだ。死んだ時に秋とはいえ服は冬では寒いだろう
と思われる服なのに

アマテラス

（甘寺素さんのおかげでしょうか。これはありがたいです。）

この男、神話は全く知らないのだ。おまけに山で籠もって自給自足
の生活をしていたため機械類に疎い。その疎さはどこぞのうっかり
並みだ。

「そこにいるのは誰ですか！！ここに何の用だ！！」

「おやあ？」

声をした方を見ると黒一色の服を着て何か武器を構えてるように見
える少女がいた。

「私は玄武甲羅ですよお」

「何をしにきたかを言いなさい！！」

「んゝ森の気配を探っていました。」

「ッ！貴様マスターか！！」

「ま、ますたー？」

「惚けても無駄だ！！」

そう言い切りかかるようにくる少女。

そして不可視の剣が玄武に直撃する。

「ボケてないですよ。まだ私は28歳です。それと、今の音と私の頭の何かが当たったようなのは何ですか？」

直撃するが無傷。しかも攻撃されたことに気付いていない。

「ッ！？」

少女はうろたえたがやはり歴戦の騎士。すぐに思考を回復させて次の攻撃を行う。

「風王鉄鎚！」
ストライクエア

（この男はおかしい。何の魔力もないのに私の剣を受けきったことが。ならばここは一時引いて……）

そして空気の塊は玄武に当たり

「？」

霧散した。

「そ、そんな……」

ここで黒服の女騎士の直感が働く。

（この男はおかし過ぎる……エクスカリバーを受けきったりストライクエアを霧散させたり……メイガス（魔術師）か？だが演技には見えない。）

「あの、あなたはメイガスではないのですか？」

「めいがす？なんですかそれは」

「そうですか。ではここに来た理由は？」

「森に動物の気配が一切なかったので気になって来たんですよ。」

「やはり……一般人でしたか。」

「？ところでその剣はあ？さっき持ってなかったようにみえましたがあ」

「え！？ああこれは……そ、そう手品です！！」

「ほへへ、すごいですねえ……」

（あ、危なかった。もしこの男が頑丈でなければ一般人を殺してしまふところでした……）

「ところで、森を抜けるにはどうしたらいいのでしょうか？」

「へっ？こ、こっちです。」

「有難う御座います。」

（これは無視されていても切繼に報告した方がよさそうですね……）

「（マスター、一般人が森に迷いこんでいたので森の外へ案内します。）」

「（……………）」

（やはり無視ですか……）

騎士の少女とそのマスターの溝は深くなっていく……………

つきましたねえ（後書き）

最初英霊にしようかと思ったんですが……一般人なので一般人のままいこうと決めました。

食人鬼の方もちゃんと投稿します。

誤字があれば報告してください。

修正しました

衛宮さん視点ですねえ（前書き）

一^{サブ}般^{メイン}人が食人鬼のお気に入り件数越えました。
……泣こう

衛宮さん視点ですねえ

ーペロリスゲフンゲフン…

ー某テロリストー

有り得ない…魔術師でもないのにセイバーの一撃を受けきった…！？

本当にサーヴァントではないのか…？

それに攻撃されたことに気づいていないなんて…いや、僅かに攻撃される前に顔をしかめた。
殺気を感じてはいるようだ。

こんな一般人がいるのだろうか…結界の外側でかかったのではなく内側で反応した…。つまり何もない空間からそこに現れた。魔法使いか？いや、魔力は感じない。

…止めだ。この男は謎過ぎる

サーヴァントの攻撃を無効化するなんて封印指定並みだ
危険なものは早めに…

「ねえ切嗣、どうしたの？」

「なんでもないよ、イリヤ。お、またクルミを見つけたぞ。」

「え！？どこどこ！？」

「あはは、あれだよ、あれもクルミの一種。でも食べることは出来ないんだ。」

「むー！切嗣ずっとズルしてたあ！！」

「はは、ごめんよイリヤ」

「（マスター、一般人が森に迷い込んだようなので森の外に案内してきます。）」

セイバーから念話がきた。でも僕は

「(…………)」

無視した。道具に感情はいらない……。

衛宮さん視点ですねえ（後書き）

行間をあけたほうが読みやすいとありましたのであけてみました。

読みやすくなってでしょうか………？

切継さんを切嗣さんに修正しました。

倉庫街ですねえ……（前書き）

一般人の感想数が食人鬼を越えた……
ゴファツ（吐血）

倉庫街ですねえ……

ー主人公ー

黒スーツ（※セイバー）さんから森の外へ案内してもらったのはいいんですがあ…………

「ここ、どこでしょうかねえ。」

絶賛迷子中です。

数時間後

~~~~~

本当にここどこでしょうなあ。

お金がないので食事出来なくてお腹がすきました……  
働きたいで御座るう、働きたいで御座るう……。

おやあ？、ここはどこでしょうか……？  
どうやら倉庫……がいつぱありますねえ。  
むう？なにやら防御率が二段回低くなりそうな金属音が…………

ーランサー& amp; セイバーー  
ちよつと時は遡る

「よくぞ来た。今日一日、この街を練り歩いて過ごしたものの、どいつもこいつも穴熊を決めこむ腰抜けばかり。……俺の誘いに応じた猛者は、お前だけだ」

低く、嬉々とした声で讃える二槍の男……ランサーのサーヴァント

は、自然体でその猛者に問い掛ける。

「その清涼な闘気……セイバーとお見受けしたが、如何に？」

「その通り。そういうお前はランサーに相違ないな？」

「如何にも。……フン、これより死合おうという相手と尋常に名乗りを交わすこともままならぬとは。興の乗らぬ縛りがあったものだ。」

ランサーの言葉にセイバーも顔を弛緩させた。同意見のようだ。

「是非もあるまい。もとより我ら自身の栄誉を競う戦いではあるまい。お前とて、この時代の主のためにその槍を捧げたのだろうか？」

「ふむ、違いない」

ランサーは苦笑する。

これから殺し合うようには聞こえないが実際は殺気が飛び交っている。サーヴァントの殺気を耐えられるアイリさん何者。

「我が主に勝利を捧げるべく、こうして好敵手が来るのを待っていたが、招きに応じたのが最良と名高き剣の英霊とは僥倖だった。」

「ほう、尋常な勝負を所望であったか。誇り高い英霊と相見えたのは私にとっても幸いだ。」

お互いに笑みを浮かべ、戦闘体勢へと移る。

ランサーは己がエモノの二槍を構える。

それは不死鳥が翼を広げる姿を幻視させる。

セイバーも黒のスーツから愛用の白銀の鎧へと早変わりする。その手には不可視の、魔力で包まれた聖剣が握られている。

「それでは……いざ。」

ー主人公ー

な、なにやら物騒な雰囲気にいゝ…。

止めた方がいいのでしょうかあ……ってあそこに別のヒトkもとい人影が……。

……ポケモ○ネタ多いですねえ。

……むさいおっさんと女の子に見える男の子のペアって誰得なのでしょうかあ…………。

「あのうゝ」

「おわっ!？」

めっちゃ吃驚されました。こっちが吃驚しましたよう。

「おう？坊主、いつからおった？」

ぼ、坊主……私はこれでも28なのですが……それと私は存在感があまりないのでしょうか……。

「ついさっきですよお、道を聞きに来たのもうひとつ聞きたいことがあるのですが……。」

「ほう、その質問とはなんだ？」

い、威圧感が凄いですねえ、歴戦の戦士そのものです。

「あの人達は一体何故殺し合っているのですか？」

それをいうと某蛇傭兵の声の男はキョトンとした顔のあとぶわっはっはっはと笑いました。

なにか……変なこと言いましたかね？

「ああすまん、警戒していた余が馬鹿らしくなってな。」

「あ、暗示が効かない……………」

「そ、そうですかぁ……………。ところで少年は何をしようとしているのです？」

「い、いや何にも……………。（まさか一般人！？なんでこんなところに！！）」

「おっどうやらランサーが宝具を使うようだぞ？」

そして騎兵とそのマスターとおまけの一般人は二人の戦いにどこぞの隣の晩御飯番組のように突撃する



倉庫街ですねぇ……（後書き）

ドスやってて思ったんですがラオシャンロンってどうやって生殖するのでしょうか

**安西先生、出番がないです。(前書き)**

ちよ…………ユニークが約2日で1万9千越え…………!!?  
夢?

## 安西先生、出番がないです。

『戯合いはそこまでだランサー』

静寂を破った冷淡な声が響く。

「ランサーの………マスター………！？」

驚きと共にアイリスフィールドが辺りを見渡すが人影はない。どうやら遠距離から遠見をしているようだ。

穴熊を決めこんでるのはランサーのマスターも同じではなからうか。

『これ以上勝負を長引かせるな。そのセイバーは難敵だ、速やかに排除しろ。宝具の開張を許す。』

「了解した。我が主よ。」

マスターへの返答が終わると共に急激に殺気を研ぎ澄ませるランサー。

そして構えを改め、左手の短槍を放り捨てた。

その行動に動揺したがセイバーは平常心を取り戻し右手の宝具を凝視する。

長槍に巻かれた呪符がペリペリ……と剥がれていく。

剥がれていく様を見ているとそれを自分も剥ぎたくなってくる自分は異常だろうか。

## 閑話休題

呪符が剥がれ現れたのは、穂先から柄まで赤い真紅の槍。その穂先から禍々しい魔力が揺らめいている。

「そういうわけだ。ここからは殺りにいかせてもらう。」

そう低く呟き、ランサーは先程までの鳥のような独特な構えとは違い、セイバーも見慣れた構えをとる。

同時にセイバーも構え直し、先程以上にランサーの動きと槍に注意を向ける。

宝具の効果の発揮は大きく分けて二つである。一つはセイバーのもつエクスカリバーのように真名開放とともに爆発的な威力をもつタイプ。

そしてもう一つは武器自体に宝具としての能力が付加されたタイプである。

こちらのタイプは一撃必殺としての威力が欠けるが、常に効果を發揮するため戦闘で優位に進めることが出来る。

第5次聖杯戦争のバーサーカーの十二の試練がそれである。

セイバーの見立てではあの槍は後者。次で決めるという気迫が感じられないため、引き続き戦闘を続行して此方を仕留める腹づもりだろうと。

先に動いたのはランサーだ。二槍の時とは違う正道の突き。愚直なまでの突進をセイバーは剣で受け止める。が。

「な!?!」

槍の穂先と剣がぶつかった瞬間、剣に纏っていた風が剥がされ、突風となり両者の足場を崩す。

「晒したな、秘蔵の剣を」

「……………」

ニヤリと笑うランサーに解せないという沈黙するセイバー。ここで攻撃しないランサーはやっぱり騎士である。

「刃渡りも確かに見て取った。それでもう見えぬ間合いに惑わされることはない。」

宣言と共にランサーが先程とは比べものにならない程の勢いでセイバーに次々と突きを繰り出す。

セイバーも自らの獲物で槍を捌くが。

徐々にに焦りが顔に浮かんでくる。理由はわからないが真紅の槍と自分の剣で打ち合うたびにインビジブル？エアが乱れて剣の姿が暴かれるのだ。

だがこの程度でひるむことはない。

セイバーはランサーの突きやなぎはらいの中に比較的浅いものが混じっていることを気づいた

これならば己の鎧で防ぐことができる。

そう判断し、セイバーは袈裟斬りのカウンターの一撃を繰り出した。鮮血が舞う。

だが怪我を負ったのはセイバーだ。

直感に身を任せ体をひねった。それは正解である。ランサーの槍はまるで無いかの如く貫いた。

ゴロゴロと地を転がり距離を取る。

立ち上がって構える。その脇腹には浅いが槍による一撃が刻まれていた。

「セイバー!!」

アイリスフィールがセイバーに近づき治癒魔術を掛ける。

「有難う御座いますアイリスフィール。治癒は効いてます。」

どうやら痛みは残っているらしい。

「やはり易々と勝ちを獲らせてはくれぬか……。」

そうランサーは言うがその顔に苦渋の色はない。むしろ良くよけたと喜悅の表情を浮かべている。

直感で致命傷をさけることができたセイバーは一つの答えに辿りついた。

……あの赤い槍の能力は、おそらく魔力の破壊。

それならば先程インビジブル？エアを無効化されたのも、自身の鎧を苦も無く貫いたのも納得できる。

打ち合いで、破壊することができるのは。穂先のみのようなが。サーヴァントの戦いに魔力のない戦いはありえない。各々の魔力量が戦闘に重大な影響を与える聖杯戦争では極めて有用性の高い宝具だろう。

……どこぞの漫画ではハリセンだったりするが。

ならばと思いセイバーは鎧を散らす。

鎧が意味を成さないのならばその分を自身のスキル「魔力放出」につぎ込み、身体強化した方がいいとセイバーは判断した。

「その勇敢さ。潔い決断。決して嫌いではないが……この場に限って言わせてもらえば、それは失策だったぞセイバー。」

「さてどうだか。諫言は、次の打ち込みを受けてからにしてもらおうか。」

そしてセイバーはランサーに突貫する。

**安西先生、出番がないです。（後書き）**

d sでは400字しか書けないという罫  
うぼあ

**あれ、また出番無しですかぁ？（前書き）**

宗教で23の5..00から24の5..00まで滋賀に行っていました。  
移動の時一人「ドキドキ☆八時間耐久！乗り物酔いで吐くのをいつまでもつかな☆」をしていました。

あ、そうそう、バスの中で塔の上のラプンツェル見ました。  
マキシマム高性能すぎる



あれ、また出番無しですかあ？

再び蝶の如く舞う血飛沫。

互いに傷は負った両者は距離をとる。

セイバーは直感で身を捻り串刺しを避けることができたものの、完全にはよけることはできずに左腕にランサーの放り捨てられた短槍で傷を負った。

ランサーもセイバーが体勢を崩したことにより必殺は避けることができた。

どちらも負った傷は浅い。

ランサーは時間を巻き戻すが如く高速で傷が塞がるが、セイバーはアイリスフィールが治癒魔術を使用しても左腕の傷は塞がらない。

「我が『破魔の紅薔薇』ゲイ・ジャルグが前にして、鎧が無為だと悟った迄はよかったな。が、鎧を捨てたのは早計だった。そうでなければ『ゲイ・ボウ（必滅の黄薔薇）』は防げたものを。」

最早隠すこともないと己の宝具の真名を明かす。そして次に見せたかまえば戦闘開始時と同じ二本の槍の彼が生涯をかけ修得した二槍流の構えであった。

魔力を打ち消す紅槍と決して癒やさぬ傷をつける黄槍。

ここまでくると断定出来る。アーサー王伝説にも関わりのあるケルト神話に綴られるその英雄の名前は……。

「成る程、もっと早くに気づくべきだった……。フィオナ騎士団、随一の戦士……“輝く貌”のデイルムッド・オディナ。まさか手合わせの栄に与るとは思いませんでした。」

「何、誇れ高いのは俺の方だ、セイバー。」

かの名高き騎士王と鏖競り合って、一矢報いるまでに至ったとは……フン、どうやらこの俺も捨てたものではないらしい。」

真名を知られてもランサーの表情は清々しいものであった。互いの名が分かった今、ようやく騎士として尋常な勝負が始めることができる。

だが対照的にセイバーは内心で歯噛みをせざるをえなかった。左腕に受けた治癒不可能ではあるが浅い傷。だが左手の親指が動かない。腱をやられたのだろう。

これでは彼女の切り札であるエクスカリバーを使うことができない。両手で満足に握ることが出来なければ発動の反動に耐えることができずに後ろへと飛んでいってしまうのだ。

金の大筋の光を剣から出しながら飛ぶ少女。

……シニールである。

だがセイバーの闘志には微塵の揺らぎもない。むしろ終戦でこれだけの強敵と対峙したことで、益々の昂りを見せている。

そしてその闘気はランサーにもとどいていた。セイバー同様、生粋の騎士であるランサーもこの状況でなお全く戦意の衰えないセイバーに畏敬と歓喜を感じているのだ。

「覚悟しろセイバー。次は獲るぞ。」

「それは私に獲られなかったときの話だぞランサー。」

二人共壮絶な笑みをうかべ、間合いを詰める。機を伺い合うことで生まれた静寂は、冷たく緊迫した空気を作り出していた。

だがしかし  
駄菓子菓子。

雷鳴が響き二頭の逞しく美しい牡牛にひかれた戦車チャリオットが紫電をスパークさせながら空を駆けてくる。蹄と車輪が空中を蹴る度に大気が震える。

これ程の圧力は宝具以外ありえない。

そして雷電を纏った戦車はランサーとセイバーの中間に降りたった。

着地と同時に紫電は収まり、御者台に乗る巨漢があらわになった。

「双方、武器を収めよ。王の御前である。」

突如響く大音量。戦車を駆っていたであろうその男から発せられた声は物理的な圧力を伴い周囲に響き渡る。

だがランサーもセイバーも名にし負う兵。この程度では怯みもしない。

両者とも油断なく偉丈夫を見据える。

「我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した。」

瞬間、一部のぼわぼわしたところを除き再び静寂に満ちた。

**あれ、また出番無しですかぁ？（後書き）**

オリ主のモデルはプーさんです。

日ランキングの連載で10位だったのにびっくらぎょうてん。

まだ乗り物酔いが残っているのかと思った

## 外伝 仕事人「サンタクロース」(前書き)

サンタクロース

それは赤い外装を身に纏うもの

サンタクロース

それは沢山のプレゼントを与えるもの

サンタクロース

それは気配遮断をし子供の部屋へ侵入するもの

サンタクロース

それは子供の欲しいものを感じとり欲しいものを用意するもの

サンタクロース

それは白い袋を持つもの

サンタクロース

それはトナカイのひく轡に乗るもの

サンタクロース

それは仕事人だった……………

## 外伝 仕事人「サンタクロース」

「こちらサンタα、β、応答願う。」

「こちらβ。α、プレゼントの用意は出来たか。」

「ああ、ばっちりだ。あとはこれを日本の子供達にプレゼントした<sup>ミッションコンプリート</sup>ら任務完了だ。」

「俺はアメリカか……よし、α。俺は先に行くぜ。」「赤鼻のトナカイ（レッドデッド）」号のサンタβ、発進準備！」

ガコ、ウイイイイイン……ガシヨン。

「発進!!」

ギュボツ! ドウウウン!!

「ふー気合い入ってんじゃねかβのやつ俺も行くか……α行きます!!」

ドウウウン……

~~~~~  
~~~~~  
ドドドドドドドド……

「ここが日本か……平和だ。俺達の所もこれだけ平和だったら……っておおつといけねえ。見逃すところだった。」

aの視線の先、そこには少年がいた。

少年は安心してしまった顔で寝ている。

「へっ、さあて。「お仕事開始(Let's Party Time)」!」

気配を消し家へ近づく。そして防犯用の点滅ライトがあつたがそれをクリアー。

「(はっ、これぐらいはお茶のこさいさいだ……。)」

そして狭範囲強力磁力を使い窓の鍵を開けて侵入する。

「(さあて、少年君の願いは一体なんだ?)」

~~~~~

「あと最後の一人だぜ〜。あーっと場所は山奥だあ!?!」
地図には確かに山奥を示している。

「ちっどうやらやるっきゃねーようだな……。」

さあ、姿の分からぬ人物よ。首洗って待っている……」

~~~~~

「(ハア……ハア……ハア……ハア……日本<sup>ジャパン</sup>の子供は化け物か!?!  
俺が侵入した瞬間目を覚まして迎撃するなんて……!?!)」

「逃がしませんよう〜」

「いいいい!?!」

冗談じゃない! あんなのにかまってられっか!

俺はすぐさま己の相棒であるトナカイ4頭と轡を具現化させて。

「ハア！セイヤツ！」

走らせる！

ただ走らせるだけじゃあねえ。こいつは空中を走るんだ！！  
あのがきまだ追ってきてないよな……

よし、あそこで止まっているな。ふう……

ほんと散々な1日だったぜ。

まあこれだけは言わせてくれ。

メリークリスマス！

ー主人公（幼少期）ー

むう、逃がしてしまいましたねえ。

次こはもらいますよお。クスクスクスクスクスクスクスクスクスクスクス。



## 外伝 仕事人「サンタクロース」(後書き)

何故か思いついた即席クリスマス小説。

p v が10万を越えました。

ありがとうございます！

す、すないばあ!?(前書き)

え……合計p v 2万……?

え?え?ちよまつ、え?

す、すないばあ!?

ー主人公ー

やあっと出番というか喋ることができますねえ。

ふふ、出番がなくてすねている今の私の状況は某夢の国の鼠風だど『閉園時間を過ぎても残っている悪い子はだーれだ! ハハッ!』なのですよ。

「なにしてくれやがりますかこのお馬鹿!」

あ、少年がデコピンされましたねえ。

あれは痛そうです。

あ、黒スーツさんが私に気づきました。「え、なんでいんの? ほんとマジなんでいんの?」って顔ですねえ。

本当になんではいるんでしょうか私……。

「しかもっ!! なんで一般人を連れてきたんだよお!!!!!!」

「あーそれはだな。ノリだ。」

「ノリで神秘をバラすなあああ!!」

カルシウムが足りていないのでしょうかねえ? 少年は怒りっぱなしです。

「少年、鰯煎餅食べますかあ? 美味しいですしカルシウムもとれますよお」

どこから取り出した鰯煎餅を少年にすすめます。  
あれ、本当にどこから出したんでしょうかあ?

「え？……ああ、ありがと………つてちがーーーーーう！！」

おお、ノリツツコミです。

んーでしたら。

「いすかんだるさんカロリーメイト食べます？」

「む？なんじゃあこりゃあブロック状だな……」

そう言いながら食べるいすかんだるさん。

そして……！

「おお！、美味しいなこれは！」

中の人ネタ………来ませんでしたねえ………

あと黒スーツさんこっちガン見してます。

あ、女性から涎がでると注意されています。

食べたいのでしょうか………？

「貴女も食べますかあ？」

「え！？え、ああ、いや、しかし………」

黒スーツさんは悩んでいます。あとカロリーメイト。あなたどこから沸きました。

あ、そうだ。

「そこのいけめんさんもいかがです？カロリーメイト。」

「俺は結構だ。敵か味方かどうか分からんものから食料は貰わない。」

「むー、そうですかあ………」

がっかりとしてもとの位置に戻ります。この乗りもの私の身長（157）ではよじ登らなければいけないので大変です。

……黒スーツさんからなんだか餌を求める子犬の様な目をむけられてますが全力で無視します。

そのとき「パァン」という音がしました。

あ、頭が痛いですう……。。

私はなにがあたったのか見てみると……

銃弾？ほへー私命狙われて……。。

ひい！？じゅ、銃弾！？

す、すないばぁがいるのですかぁ！？

あ、あわわわ……。。

ー三人称ー

あわわと言いながら混乱する玄武をみてここにいるもの全てが多少の差異あれどこう思った

「「「（なんで銃弾くらっても平気なんだよ……。）」」「」」

一瞬にして戦場がほのぼのとした空気に包まれた。

す、すないばあ!?(後書き)

今日も主人公の周りは平和です　まる。

**外伝 もうすぐでお正月ですねえ（前書き）**

もうちょいで正月です。

あ、年賀状書いてない……………

今回は玄武と私の会話です。

本編とはあまり関係がございません。

今年最後の投稿です。

## 外伝 もうすぐでお正月ですねえ

玄武（以下玄「こんにちはこんばんはおはようございます。略しておはこんばんちはですよ。」

なんでおはようが最後なのか激しく気になるけど無視！ささっとすすめるべ。

玄「この小説では殆どのが“大半アマテラスのせい”で片付きますからねえ。」

アマテラス哀れすぎる。

話は変わるけど玄武、今年の年越し蕎麦は誰と食べるんだ？

玄「白虎と青龍と朱雀と麒麟とで食べます。」

あれ……一人多くね？

四獣だよ？なんで五？

玄「知らないのですか？中央にも存在してるんですよ。因みに麒麟は聖獣の中で一番強いんですよ。」

うぐふう。つかその設定今出しているのか。

玄「いいですよ。どうせ貴方が苦しむんですし。」

黒い！黒いよこの子！28歳性別男なのに子扱いはきついけど。

玄「そーいえばなんで私が5人組の中で一番背が低いんですかあ。」

「ちよっ！？がくがく揺らさんといて！！出ちゃう！！胃液出ちゃう！！

それと低いのはそうしないと青龍（2m30cm）によじ登れないでしょ！！

玄「むう……青龍の頭に登れないのは嫌です。」

でしょ！！だから離し……うげるぽっ

玄「む！汚いですよお。」

誰の……せいだと思って……。

玄「私ですよお♪」



全くこのエターナルシヨタは……。

あ、そういえば。

玄「どうしたんですかあ？」

お前さんの容姿……書いてなかったわ。

玄「む、それはゆゆしき問題ですよお。」

じゃ、玄武の容姿説明。

髪は赤銅色、髪型はぼさばさで肩につくぐらいの長さ。

服装は茶色のタートルネックとぶかぶかのホラ、なんていうか……

：DQの布のズボンを長くしてずりずりぐらいなやつ。

玄「服について全然興味が無いことが仇になりましたねえ。」

わっちファッションに興味なぞないもーん。

玄「でも調べくれないといつまで経っても服のデザイン決まりませんよお？」

そーだけどさー。って正月の話なのにずれよったあー危ない。

玄「（むう、逃げましたか。）」

年が明けると初詣とかで神社の人達は大変だろうな。

玄「朱雀のところが神社だったので私を含めた四獣と中央の麒麟とで手伝いに行きますねえ。何故か青龍がいたら参拝客が青龍から離れてしまいますが……。」

（そらでかいからな……）じゃあ手伝いの意味無くない？

玄「ところがぎっちゃん！私がよじ登っているとお客さんが戻ってくるのです！」

（どこのハニー先輩とモリ先輩だよ……。）

他は？

玄「麒麟と白虎は売り子さんですよ。朱雀は神主さんをやってますよお。」

（……やろうと思えば星破壊出来る連中が売り子で、神主で、客寄せパンダておい）

玄「む？どうやら文字数が限界に近いようですう。」  
あらまほんと。

それでは皆さん。  
玄「よいお年をおく。」  
「

## 作業中（前書き）

まだ途中です。

## 作業中

―優雅な時臣氏―

「時臣、我はあの雑種に興味<sup>オシ</sup>が湧いた。」

「は……………?」

いきなり何を言い出すのでしょか我が王は……。

「我が王よ、あの人間は得体の知れぬモノなのですぞ!」

「だからどうした? 我に時間をとらせるな時臣。」

「ッ! ……分かりました我が王。お氣をつけて。」

「ふん。」

ボタン

「……………」

「……………暇だ。」

ユウガン

〔倉庫街〕

あわわはわわとどこぞのギャルゲーの武将のように慌てる玄武を除き、また空気はシリアスに包まれそうになっていた。

『そうか、よりによって貴様か。』

怨嗟に満ちた声が広がる。

声の主は未だ姿を見せぬランサーのマスターである。

その声はランサーに命令する時とは違い憎悪が込められていた。

『一体何を血迷って私の聖遺物を盗んだと思ったが……。よりにも

よって自身が聖杯戦争に参加する腹だったとはねえ。ウェイバー・ベルベット君。』

名を呼ばれたウェイバーは声の主が誰だったのか理解して震えあがった。

声の主は時計塔の筆頭講師にして今回のマスター内で“魔術師”として最高の実力を持つケイネス・エルメロイ・アーチボルトだ。

『残念だ、実に残念だなあ。可愛い教え子には幸せになってもらいたかったんだがね。ウェイバー、君のような凡才は凡才なりに凡庸で平和な暮らしを手に入れられた筈だったのにねえ。』

嘲りと侮蔑を含んだ声にウェイバーは何も言い返すことができない。自分はこの高慢で傲慢で慢心な講師を見返すために聖杯戦争に参加したのに、初めて感じた殺気で身をすくめてしまった。

『致し方ないなあウェイバー君。君については、私が特別に課題授業を受け持つてあげよう。』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6125z/>

---

最硬の肉体を持つ一般人

2012年1月1日22時49分発行